英語科教育と英語文学研究(2)
―想像力の実践
How Can English Literary Studies Contribute to English Education? (2): For Practicing Imagination to the Other

仲 潔・林 日佳理
NAKA Kiyoshi・HAYASHI Hikari

1. はじめに

1990 年代まで、英語教材にとって文学作品は「定番」であった。例えば、森住（1993）は「この範疇に入る題材は、高校では文学教材、中学では物語教材などといわれるもので、英語教科書の素材として、いわば『安定』教材の 1 つである」（同: 44）と述べている。当時の『学習指導要領』において、すでに「コミュニケーション能力の育成」は謳われていた。平成元年度版の学習指導要領には、「題材の形式としては、説明文、対話文、物語、劇、詩、手紙などのうちから適切に選択すること」（文部省 1988: 130）とある。

ところが次第に、社会における「実用性」を理由として、英語教材の中心から文学作品が周縁に追いやられていった。例えば、2014 年 9 月 19 日に開催された「第 1 回 まち・ひと・しごと創生会議[1]」（於・官邸）では、冨山和彦が「シェークスピアや文学概論ではなく、大学のある地域の観光名所や歴史、文化について英語で説明できる能力をつけさせるべきであると主張」[2]している。2016 年 3 月 31 日に公開された、文部科学省委託事業である「平成 27 年度 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の報告書（いわゆる「コア・カリキュラム」）においては、「英米文学という枠がもういらないのでは？『異文化理解』の一部が英米文学では？」（同: 51）という「有識者」のコメントが掲載されている。このような状況のもと、昨今の中学校向け英語教科書には、文学教材は巻末の付録であるかのように扱われていることが多い。

しかし、文学教材は「実用的ではない」とする見解は、短絡的である。齋藤ほか（2010: 230）によると、18 世紀のスコットランドでは、社会経済的発展のために英文学を大学のカリキュラムに入れたという。つまり、「実用的だから」こそ、文学作品は教材の「定番」となったという経緯があるのだ。教育学者の佐藤（1997）は、「なにがよい教育なのかを尋ねても見解は人さまざまであり、教師の実践を客観的に評価できる安定した基準は、どこにも存在していない」（同: 97）と述べている。このように考えると、文学作品は「実用的ではない」という見解は、思い込みに過ぎない面もあろう（仲 2016）。

もちろん、だからといって、文学作品が万人にとって効果的な教材であるというわけではない。しかしながら、「文学は不要」というわけでもない。このような立場から、筆者たちは、「英語科教育と英語文学研究(1)」（仲・林 2020）において、中学校・高等学校の英語科教育を念頭に、語彙・文法・授業時間数の制約を考慮しつつ、文学研究のうちどの側面をどの程度まで取り入れることが可能なのかを考察し、「共感力の育成」を提案した。すなわち、①（言語外の）コミュニケーションを読み取る力の育成、② 異言語や異文化に対する理解、③ 異文化に接する態度の養成を柱とし、わかりあえない他者・経験していない出来事に対する想像力の育成に、文学研究の成果が英語科教育における「コミュニケーション能力の育成」に寄与できると論じた。他者への想像力を働かせ、共感的な関わり方をしていくことにより、国・地域・人種・社会的環境の違いを尊重することの大切さを学習者が身につけることが期待できる。そのために、文学の特性を生かすことができるのだ。

---

[1] http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/

[2] http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/souseikaigi/h26-09-19-siryou3-5.pdf

既存の学校教育制度の科目の中でも、「英語科」はもっぱら扱う対象が「異言語・異文化」という「異質性」である。言語文化が異なる者同士のコミュニケーションでは、内輪でしか通じない価値観ではなく、わかりあえない場合も見据えた他者性への尊重ないしは理解しようとする態度が求められる（Byram 1997）。そうだとすれば、異質性を扱う英語科教育が果たすべき役割は、言語表現の習熟という技能面だけではないはずである。文学作品が扱う異質性を手がかりに、学習者たちの「共感力の育成」がいかにして可能なのか、という面にも貢献すべきであると考える。

そのためには、「英語」というコミュニケーションの「手段」だけではなく、世界史や現代社会に関する知識、さらには道徳などとの科目横断的な考察力を育てる基盤をつくることが不可欠である。英語科教育において、科目横断的な取り組みは CLIL（Content and Language Integrated Learning、内容言語統合型学習）と呼ばれるが、本稿で取り上げる文学研究の成果を生かした授業実践は、この CLIL という近年の流行にも分類しうるものである。

以上のような問題意識にもとづき、本稿では日本の中学校・高校において、文学研究を活かした教育実践例を取り上げる。さらに、単に紹介するだけにとどまらず、いかにして「共感力の育成」に寄与しうるのか、についても考察する。

2. 講話と倫理

高等学校英語教科書 *Crown II* には、現代アメリカ作家 George Saunders（1958－）の卒業講演スピーチをもとにした “Err in the Direction of Kindness” が「オプショナル・レッスン」（補助教材）として収録されている（Crown II、172-176）。これは、子供時代のエピソードを切り口に、「やさしいひとになる」ことの大切さを真摯に、かつユーモアを交えながら語るという内容である。いじめをうけていたエレンという同級生に何もしてやることができなかった語り手は、生涯の後悔として他者への「やさしさがたりなかった」と述べ、未来を前にした若者たちに同じ過ちをおかさないように呼びかける。このシンプルで率直なメッセージは、講演の行われたシラキュース大学のみならず世界中に広まり、各国で翻訳や書籍化による紹介が行われたのみならず、日本の高校英語の教科書（Crown II）の題材として選ばれるまでになった。

ただ、あくまでオプショナル・レッスンとして、である。限られた授業時間の中で規定のカリキュラムをこなし、大学受験をも意識する高校英語教育において、こうした補助教材は活用されないままに終わることが多いのではないだろうか。

しかし、活用の仕方によっては、この教材は「コミュニケーション能力の育成」を軸とした英語の習得のみならず、倫理や道徳といった他教科との連携や総合的な学びへとつながり、学習者の異文化間性を高めたり、物事を多角的に見る力が養われたりすることが期待できる[3]。ひいては、学習者の将来の進路の選択肢を広げるという多様な学びへとつながる可能性を秘めている。以下では、その特色と活用法について検討していく。

この教材においてまず特徴的なのは、扱われる内容と形式の「親しみやすさ」である。世界中の様々な問題――文化・科学・歴史・国際協力・平和・宇宙――を扱う教材に比べ、このスピーチは、Saunders が中学生の時に転校してきた女の子の話から、その後周りの人々に対してどう接してきたかを省みる内容であるため、学習者が自身の経験と照らし合わせて考察することが容易である。また、語っている Saunders の

[3] 異文化間性とは「異なる文化が出会い接触するところから生まれるもので、相互のやり取りを伴う（これがまさに異文化間と形容される）付き合いやインタラクションの総体」（カルトン 2015: 9）のことである。学習者の異文化間性の養成と文学の関係については、仲・林（2020）の第 3 節を参照。

人柄や口調を垣間見ることもでき（実際の Saunders の講演を YouTube［シラキュース大学チャンネル］で視聴することもでき、ところどころで笑いを誘う話し方を知ることができる[4]）、書き手の個性を意識することのない他の教材とはちがった印象を与えるだろう。目の前の学生に対して二人称 “you” を頻繁に用いながら諭すように続いていくこの文章は、語り手自身の他者とのコミュニケーションの失敗を例に、いま新たな世代の他者たちへコミュニケーションを開こうとするものであり、英語科教育の目指す「コミュニケーション能力の育成」にはうってつけの教材である。なぜならこの文章は、他者とのコミュニケーションの難しさと大切さを、内容と形式の両面から伝えようとするものであるからだ。

さらに、この教材は「他者へのやさしさ（kindness）」という主題が明確であり、倫理や道徳といった英語以外の教科につながるような問いを含んでいる。スピーチの中で Saunders が挙げる、「やさしくなれなかった理由」や「やさしくなるためのアドバイス」について、意見を交わしたり、例を挙げたりすることも有益な学習活動となるだろう。同時に、教科としての英語というよりも、日常言語としての英語がどのように使われ、どのような状況の中で何について話されているのかを知ることもできる。卒業式の講演スピーチという慣習、アメリカの教育システム（7 年生という言葉が出てきたり、卒業式が 5 月にあるということなどが分かる）についても知る機会となる。とりわけ重要なのは、話す言語も暮らす国も違う人の考えや感情にふれることで、世界中の人々についてもっと知りたい、そのために母語以外の言語を習得したい、という動機付けになりうるということである。このような態度の涵養することで、教科書に掲載された会話表現を反復するだけの活動を超え、学習者の異文化間性を高め、より深いコミュニケーション能力の育成へとつながりうる。日本人の多くが英語を用いてコミュニケーションを図る場合、それは異文化コミュニケーションであることが多い。異文化間性を滋養することにより、「他者を認め、自らの心を開き、他者の考え方に思いをめぐらせ」たり、「他者は異なっているとの考えを受け入れ、その違いも正しいものと理解できる」（同: 10）態度が育成される。これにより、定型表現にあてはめただけの会話ではなく、他者の他者性から物事の見方や価値観がゆさぶられ、変容されることへとつながるという意味で、対話的なコミュニケーションが可能となる[5]。

また、この教材は、Saunders の主張や社会観を反映した文学作品への入門編としても利用できる。彼の小説作品は日本語への翻訳が多数あり、英語原著にもアクセスしやすい。そのような作品の一つに、*The Brief and Frightening Reign of Phil*（2005）（『短くて恐ろしいフィルの時代』岸本佐知子訳）がある。この中編小説は、“Inner Horner”（内ホーナー国）と “Outer Horner”（外ホーナー国）という架空の国の諍いを描き、他者への寛容さの欠如が独裁や大量虐殺につながっていくというストーリーである。「昔あるところに、あまりにも小さいので一度に一人しか国民が住めない国があった」[6]という設定からわかるように、

---

[4] 近年のコミュニケーション研究においては、同一の語彙・文法・発音であっても、その発話の話し手に対して聞き手がどのような印象を持っているのかによって、発話そのものへの意味づけが異なることが指摘されている（ブルデュー 1991、New London Group 2000 など）。余力があれば、YouTube で著者の人柄を多少なりとも知った上で、教科書に掲載されている英文を再解釈したり、英文だけの情報から得た解釈との比較を行ったりするなどの発展的な学習も考えられる。

[5] 詳しくは、カルトン（2015）や西山（2015）を参照。

[6] 原文冒頭：“It’s one thing to be a small country, but the country of Inner Horner was so small only one Inner Hornerite at a time could fit inside, and the other six Inner Hornerites had to wait their turns to live in their own country while standing very timidly in the surrounding country of Outer Horner.”（Saunders 2005: 1）。岸本による訳：「国が小さい、というのはよくある話だが、〈内ホーナー国〉の小ささときたら国民が一度に一人しか入れなくて、残りの六人は〈内ホーナー国〉を取り囲んでいる〈外ホーナー国〉の領土内に小さくなって立ち、自分の国に住む順番を待っていなければならないほどだった。」

現実離れしたおとぎ話の形式をとりながら、同時にナチス政権やルワンダ内戦、9.11 とイラク戦争など歴史的な出来事との関連をも多分に示唆する風刺的な寓話である。先に見た卒業式スピーチと同様、他者に「やさしく」できない人間の過ちを直視する Saunders の姿勢がここにも見られる。このような文学作品を紹介するだけでも、異文化間性についての考察につながる機会を提供することに加えて、ものごとを「深く・多角的に」見る力を高めることにより、コミュニケーション能力の育成に資することができるだろう。

このような卒業式講演スピーチには、米国の大学の創作科で教鞭をとる現代作家による優れた内容のものがほかにも多数あり、日本の中学校や高校の英語教材として活用できる可能性を大いに秘めている。Saunders と同世代の David Foster Wallace（1962－2008）による スピーチ “This is Water” や、SF 作家 Ursula K. Le Guin（1929－2018）が女性のためのリベラル・アーツ・カレッジで行ったスピーチ（“Bryn Mawr Commencement Address”）、また黒人レズビアン作家の Audre Lorde（1934－1992）による力強い抵抗と励ましのメッセージ（“Commencement Address: Oberlin College, May 29, 1989”）などは、わかりやすい英語で、将来の選択を前にした生徒たちに親しく語りかける。なぜ英語を学ぶのか、それは単に一つの教科であるからとか受験で必要であるからといった理由ではなく、将来出会うことになる言語を異にする他者を理解するために必要だからではないだろうか。そうした長期的・抽象的な視野での知的好奇心をかきたてるためにも、これらの作家による卒業スピーチは格好の素材なのである。

3. 日常を異化する

とはいえ、やはり数百語から一千語程度のスピーチを学ぶとなると、かなりの時間が必要となる。背景的な知識の整理や、倫理的な問題提起・ディスカッションの誘導など、継続的で計画的な授業展開を用意しなくてはならないだろう。そのような長期的な展開ができない場合には、英語文学作品を効果的に用いることは難しいのだろうか。

現代アメリカ作家 Lydia Davis（1947－）の短編小説には、30 語余りで終わるものや、1 文で終わるものもあり、授業時間の一部分のみでも学習者に十分理解させ、またさらなる発展的思考につなげるための種をまくような役割が期待できる。例えば、“Companion” というタイトルの短編は以下の二文で構成されている。

> We are sitting here together, my digestion and I. I am reading a book and it is working away at the lunch I ate a little while ago. (Davis 2009: 332)

ここで読者は、自分（I）と自分の消化器官（my digestion）とが奇妙に同居する “companion” であるとして見てみる、ユーモラスな視点を持つように誘われる。重要な出来事や人生の教訓を含まなくても、この作品は文学として「日常を異化する」契機を与えてくれる。「異化(defamiliarization)」とは、ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトの創作の基軸となる概念であるが、見慣れた日常の事物を、文学的想像力を介することによって、異なるもの、見慣れない、新しい意味を持ったものとして置きなおす行為である[7]。つまり、

[7] 文学における「異化」について詳しくは Lodge (1992)を参照。なお「異化」はさまざまな領域で用いられる用語である。ここであげたブレヒトによる文学的想像力はもちろんのこと、コミュニケーション研究においては、価値観を異にする他者との対話において、言語表現や文化的背景の違いなどを互いに説明し合いながら、発話の意味を確定していく協働作業であると考えられることもある（例えば、Kern 2000 など)。多くの日本人にとって、英語を用いたコミュニケーションの相手が異文化・異言語を背景にするので

自らの目に見える現実や世界の感覚を、他者の目から見たものとして経験しなおすことである。この「異化」――あるいは他者の目線の取り込み――は、Davis の「超」短編小説を利用すれば、時間的な制約の中であっても、異なる現実認識の諸相に向けて学習者の思考を活性化させるアイスブレイカーとしての役割を期待できる。

他人には世界がどう見えているのか、物事がどう捉えられているのか、をテーマとして持つ作品は、Davis には豊富に見つけることができる。例えば、“In a House of Besieged” という作品である。

> In a house besieged lived a man and a woman. Form where they cowered in the kitchen the man and woman heard small explosions. “The wind,” said the woman. “Hunters,” said the man. “The rain,” said the woman. “The army,” said the man. The woman wanted to go home, but she was already home, there in the middle of the country in a house besieged. (Davis 2009: 66)

要塞のような家に住んでいる男女の音の捉え方を切り取った小説なのだが、なぜ彼らがそのような捉え方をするのか、それぞれの理由や感情は描かれておらず、読者の想像にゆだねられている。想像の手がかりとして、女性は自然現象を挙げていて、男性は軍や狩猟者を挙げていること、最終文では女性はその家にいてもどうやら居心地が悪いようであること、などが解釈の糸口となる。この極度に切り詰められた文章を氷山の一角として、海面下に隠れている部分――文章には明記されていない部分――を想像し、自らの視点だけでなく他者の物事の捉え方にまで思いをはせることによって、文学教材ならではの「異化」作用を実践してみることができるだろう。さらに、文章の一部や単語を学習者自身で置き換え、英作文やグループ創作、寸劇などに発展させることで、コミュニケーションを発信する際の能力を鍛えることもできるだろう。このように短時間で読める短い文学作品でも、学習者の考える力を深めるきっかけとして意義のある教材となりうるのである。

さらに、Saunders の倫理的寓話にも似た「小話」も、Davis の得意分野である。“Fear” という短編を見てみよう。

> Nearly every morning, a certain woman in our community comes running out of her house with her face white and her overcoat flapping wildly. She cries out, “Emergency, emergency,” and one of us runs to her and holds her until her fears are calmed. We know she is making it up; nothing has really happened to her. But we understand, because there is hardly one of us who has not been moved at some time to do just what she has done, and every time, it has taken all our strength, and even the strength of our friends and families, too, to quiet us. (Davis 2009: 258)

コミュニティの中で、恐怖のあまりパニック発作を起こしてしまう一人に対して、残りのメンバーは自分もそうなりうるのだからと理解を示し介抱する。この短編は、その短さゆえに、人物たちがおかれた特定の状況や背景、パニックを起こしてしまう理由や経緯については何も示さず、ただコミュニティのなかの一人と全体の行動をシンプルに述べるのみである。だからこそ、この小話はいろいろな文脈に当てはめて想像することのできる普遍的なシチュエーションでもあり、外国の文化や言語にあまり関心のない学習者にとっても、比較的抵抗を感じることなく受容される素地があるのだとも言える。

このように、英語の文章をじっくり分析する以外にも、日常の事柄を新しい視点から（または他者の視点から）考えるためのきっかけとして、Davis の「超」短編作品を教材とすることは有効である。これらの短

あれば、求めるべき「コミュニケーション能力」にはこのような「異化」という視点は不可欠であろう。

い文章を授業のはじめのアイスブレイカーとして活用したり、読書タイムなどとして 10 分程度の時間を設けて取り入れたりするなど、連続的な活動としても十分活用できるものである。

4. 現代のコミュニケーションツール

令和２年度より、岐阜市内の小学校・中学校でのタブレット端末使用が促進されている[8]。このような状況の中で、英語科教育の分野でも、どのようにタブレット端末を活用した授業ができるのか、という点は現在もっとも関心の高いトピックの一つであると言えよう。本節では、そうした ICT 機器を利用した教育体制においても、文学教材を活用できる可能性があることを示していく。

紙の本だけではなく電子書籍や情報端末上の文章も読まれるようになった現代にあって、アメリカの小説家 Jennifer Egan（1962－）はしばしば自分の作品の中に電子メディアを取り入れている。例えば 2012 年 5 月には、ツイッターを使って短編小説作品を著した（“The Black Box”というタイトルの作品を *The New Yorker* のツイッターアカウントを通じて 9 日間にわたって連載した）。また、Egan の代表作 *A Visit from the Goon Squad*（2010）は、それぞれの章を別の語り手が語る群像小説となっているが、そのうちの一つを少女が学校で発表するパワーポイントスライドの形で表記するという仕掛けをとっている。従来の小説の形式（白いページ上に文字の列が何十行とつづく）の中に突如差し込まれる、図形と単語を組み合わせた新鮮な語りの形式が、文学の自由さ――文学では何でもアリなんだ、ということ――を実感させてくれるものとなっている。このスライドの章は、本の中に印刷して収録されているだけでなく、作者のホームページ上でスライドショーとして（音楽もついた形で）公開されている[9]。

授業の中でこのスライド小説を紹介し、読み解いていくだけでも十分興味深い教材となりうるだろう。これらのスライドは 12 歳の Alison の目線で作られており、短くてわかりやすい文や単語で構成されているため、長い文章を読むことに慣れていなくても親しみやすい。それだけでなく、図や表を交えて示されるメディア横断的な資料の読解能力を鍛える効果も期待できる。

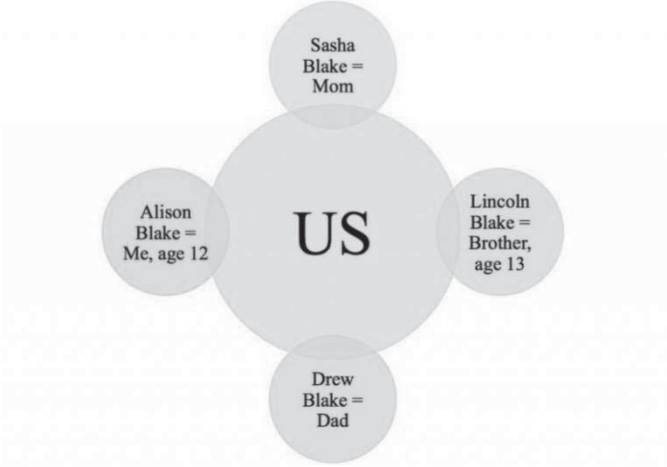

図１　*A Visit from the Goon Squad*　第 12 章“Great Rock and Roll Pauses by Alison Blake”より、スライド 76 枚中 3 枚目

[8] 岐阜市では市内の全小中学校と特別支援校に対し、全児童生徒へのタブレット端末の貸付を行なっている（https://www.city.gifu.lg.jp/39299.htm）。

[9] http://jenniferegan.com/excerpt/a-visit-from-the-goon-squad/

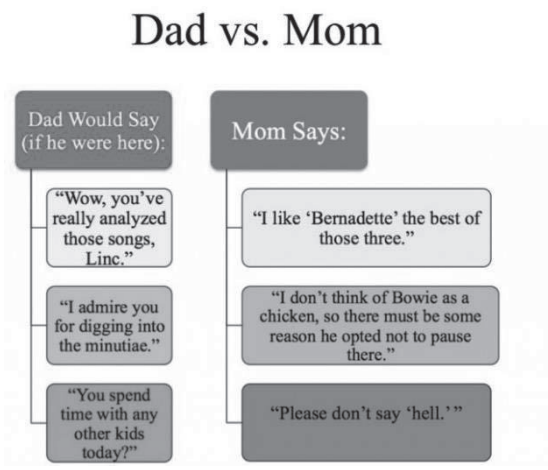

図２　同スライド 76 枚中 12 枚目

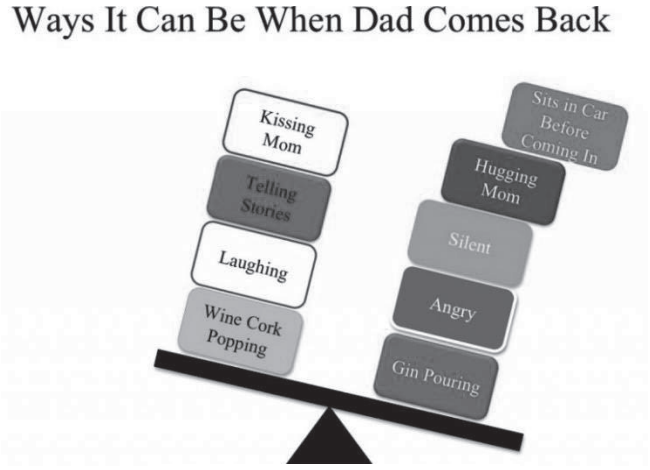

図３　同スライド 76 枚中 33 枚目

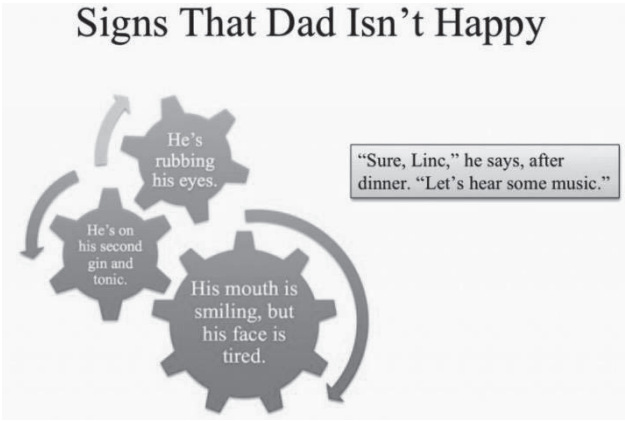

図４　同スライド 76 枚中 42 枚目

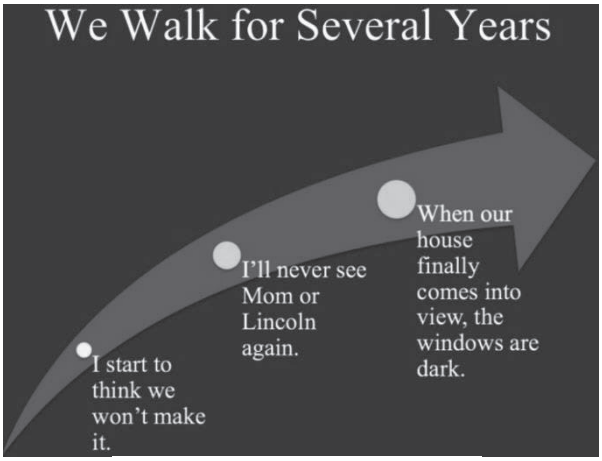

図５　同スライド 76 枚中 64 枚目

また、こうした簡便な図式をテンプレートとして、学習者自らが「スライド小説」を作成することも、有益な学習活動であるだろう。文章を長く続けることが難しくても、短いフレーズを入れるべき場所がある程度用意されているスライドのテンプレートを使用すれば、とりあえず書けるところから書いていくことができる。物語の素材は、Alison のように、学習者の日常の経験や家族のことでもいいだろうし、既存の童話やおはなしをスライドの形式に翻案してみることもできるだろう。いずれにせよ、一連のスライドを作るという形で、英語を使いながらナラティブ化（物語化）し、他者に伝えるという目的を持たせることが肝要である。どのような図式に、どのような言葉を置けば、自分の頭の中にある場面や因果関係をわかりやすく伝えることができるのか、ということを考えながら、英語とコンピュータの両方を最大限に使用して、より広範囲なコミュニケーション能力を高める効果が期待できるのである。なお、このような活動は、コミュニケーション研究の見地からも理にかなっている。グローバル化とテクノロジーの急速な発展に伴い、それまでのリテラシー教育に異議を唱えた言語学者・社会学者・人類学者・教育学者らからなる New London Group は、「マルチリテラシーズ」という造語を提唱した。彼らによると、「マルチ」とは「多言語（multilingual）」と「多様なモード（multimodal）」の２つの意味を含む。後者のマルチモダルは、言語情報以外の視覚的イメージ・音響効果・空間の利用を意味しており、これにより対話における発話の意味解釈が可能となるとしている（New London Group 2000）。つまり、「スライド小説」の実践案は、マルチリテラシーズに基づいた英語教育実践とも言える。

英語を学ぶ／教えるということは、単語や文法事項を暗記し、テストで良い点を取れるようにするとい

うだけではない（もちろんそのような知識の蓄積や定着もとても重要であるが）。英語に限らずことばというものは、それを使い他者とコミュニケーションをはかるためのものであり、英語を使う先にはつねに人間がいる。そのような側面を重視しようと、「コミュニケーション能力」や「実用性」が、『学習指導要領』また教育現場の授業で注目されているならば、他者を想像し、他者に伝えようとする文学作品もまた、目的を同じくしていると言える。そして、そのような文学作品を英語科教育の教材として使うことは、むしろもっと積極的になされてよいことなのではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、日本の中学校・高校における英語科教育において、英語文学作品を教材として取り入れる例を考察してきた。文学作品を英語教材として使用することには、他者とのかかわりの中で――つまりコミュニケーションの中で――言語を、異言語を効果的に使うことについての成熟をうながす効果が期待できる。他者とかかわること自体をトピックにしたスピーチや、日常を異化し他者の目線に立ってみることを促す短い挿話、または現代のコミュニケーションツールを活用した物語化の実践によって、学習者たちはより広範に、他者について考えることができるようになっていく。そのような意味で、『学習指導要領』が目指す「コミュニケーション能力の育成」に、文学教材は実用的な有意性を果たすことができるのである。

【参考文献】

Byram, M. （1997） *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*, Clevendon: Multilingual Matters.

Davis, Lydia. (2009) *The Collected Stories of Lydia Davis*, New York: Picador.

Egan, Jennifer. (2012) “The Black Box,” *The New Yorker* (Twitter: 25 May 2012, Magazine: 4 & 11 June 2012).

---. (2010) *A Visit from the Goon Squad*, New York: Anchor.

Kern, R. (2000). *Literacy and Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Le Guin, Ursula K. (1989) *Dancing at the Edge of the World: Thoughts on Words, Women, Places*, New York: Grove.

Lodge, David. (1992). *The Art of Fiction*. London: Penguin.

Lorde, Audre. (2009) *I Am Your Sister: Collected and Unpublished Writings of Audre Lorde* (edited by Rudolph P Byrd, Johnnetta Betsch Cole, and Beverly Guy-Sheftall), Oxford UP.

New London Group. (2000) “A Pedagogy of Multiliteracies: Designing Social Futures.” *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social Futures*, edited by B. Cope, Routledge.

Saunders, George. (2005) *The Brief and Frightening Reign of Phil*, New York: Penguin.

---. (2014) *Congratulations, by the Way: Some Thoughts on Kindness*, New York: Random House.

Wallace, David Foster. (2009) *This Is Water*, New York: Little, Brown.

カルトン，フランシス.（2015）「異文化間教育とは何か」西山・細川・大木（編）、pp.9-22.

齋藤安以子・玉井史絵・藤岡千伊奈・松田早恵（2010）「文学教材論―英文学研究と文学教 材づくり」岡田伸夫・南出康世・梅咲敦子(編)『英語研究と英語教育―ことばの研究を教育に活かす』大修館書店、pp.229–245.

佐藤学（1997）『教師というアポリア』世織書房.

三省堂（2018）『Crown English Communication II New Edition』.
仲潔（2016）「〈英語学/英米文学は不要〉という言説を問う」『社会言語学』（「社会言語学」刊行会）、pp. 95-118.
仲潔・林日佳理（2020）「英語科教育と英語文学研究(1)—想像力の育成」『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究・教師教育研究）』第 22 巻、pp. 123-132.
西山教行.（2015）「異文化間教育はどのように生まれたか」西山教行・細川英雄・大木充（編）『異文化間教育とは何か—グローバル人材育成のために』くろしお出版.、pp.62-72.
ブルデュー，ピエール.（1991）『話すということ』藤原書店.
森住衛（1993）「英語教育題材論: 第 12 回 文学教材・物語教材」『現代英語教育』（研究社）、pp.44–45.